

銅鏡（どうきょう）とは？



方格規矩鏡

(ほうかくきくきょう)



三角縁神獸鏡

(さんかくぶちしんじゅうきょう)



内行花文鏡

(ないこうかもんきょう)

熊本博物館（保存科学）の学芸員より

「子ども科学・ものづくり教室」でのレプリカづくりに使用する鑄型（いがた）は、三角縁神獸鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）、内行花文鏡（ないこうかもんきょう）、方格規矩鏡（ほうかくきくきょう）の3種類（しゅるい）で熊本県内でも出土しており、博物館の中で展示しているものもあります。

銅鏡は弥生時代（やよいじだい：およそ 2500 年前から 1700 年前までの期間）の後期、今から約 2200 年前に朝鮮半島からもちこまれた青銅器（せいどうき）で、銅（どう）、錫（すず）、鉛（なまり）をとかし合わせた合金（ごうきん）でできています。

マツリに使用されていたとされ、古墳時代（こふんじだい）の墓（はか）からは副葬品（ふくそうひん）として発見されていますので、有力者の証（あかし）であったことがうかがえます。

土の中にうもれていたため、緑青（ろくしょう）という錆（さび）により色が変わっていますが、もともとは光かがやく黄金色に近い色をしていました。また、銅鏡をうらがえすと文字通り「鏡」になっていて、当時（とうじ）の人たちは自分のすがたがうつっていることにおどろいていたかもしれません。

大きさも大小さまざまで、神獸（しんじゅう）や神などの文様（もんよう）や文字がえがかれています。また、中国大陸（ちゅうごくたいりく）からもちこまれたものを舶載鏡（はくさいきょう）、それをまねて日本でつくった銅鏡を仿製鏡（ぼうせいきょう）とよびます。当時の日本人が工夫して銅鏡づくりに挑戦（ちょうせん）していたことが資料からもわかります。